



明治学院大学機関リポジトリ
<http://repository.meijigakuin.ac.jp/>

Title	大戦間期のカナダの国際関係 エスコット・M・リード (Escott M. Reid, 1905-1999) のジレンマの視点から
Author(s)	末内, 啓子
Citation	明治学院大学国際学研究 = Meiji Gakuin review International & regional studies, 50: 207-218
Issue Date	2017-03-01
URL	http://hdl.handle.net/10723/3012
Rights	

【研究ノート】

大戦間期⁽¹⁾のカナダの国際関係

——エスコット・M・リード (Escott M. Reid, 1905-1999) のジレンマの視角から——

末 内 啓 子

1. 序

国際関係論では、国際関係を説明する照準の設定に、大きな課題を抱えてきた。その一つは、「国際システム」、「国家間関係」、あるいは「人」、どのレベルで変化を説明することが適切なのかを問い続けてきた⁽²⁾。この課題が未解決のまま、これまで多くの論文では分析レベルについて言い訳をすることが常套手段にさえなり、他の分析レベルの存在を認め言及するならば、分析レベルを限定しても許容されてきているともいえよう。もう一つは、国際関係の変化の説明に、どの程度、どのように、社会を視野に入れられるかである。国際関係の伝統的な見方では、国家を擬人化し合理的な判断ができるとし、限られたエリートによる決定を前提とし、正当化さえしてきているので、社会へのまなざしを周辺化してきた。政策決定者も社会の中に暮らし、社会に対して政策などを発信し、世論とも無関係ではないが、合理的と想定される国家とその政策決定者は、社会に対する自律性 (autonomy) が高いとみなされる⁽³⁾。そのため、研究で社会へ広く目が行き届いているとはいいがたく、国家と社会とが分析的に遊離しがちである。

NGO (Non-Governmental Organization, 非政府組織) についての高い関心からもわかるように、国際関係研究において NGO を看過しがたいといえよう。NGO は国内のみならず国境を越えて活動し、いまや国際的な行為体としての認知も受けてきている。当初、国家や政府と異なる行為体との文脈で NGO を特徴づけたが、その組織の所在地

やその活動現場の両方で社会との関係も見逃すことができない。社会から NGO への支持や支援があり、NGO から社会への世論喚起や世論形成も無視しがたい⁽⁴⁾。NGO を分析視野に入れることで、NGO と社会との関係を視野に入れる必然性も出てくる。もし、国家だけに注目すると、他のレベルだけではなく、行為体の社会との関係へのまなざしを犠牲にすることにもなりかねないのだが、NGO を取り込むことで、狭義な外交よりも広く対外関係を捉え、分析レベルの問題と社会との関係に取り組む一試行ともなりえるだろう。

一般的に、第一次世界大戦と第二次世界大戦の間の大戦間期は、カナダが国家として対外関係を展開し始めたと思われがちである。つまり、英連邦の国家として英国との関係を重視しながら、また国際連盟の加盟国として外交関係を拡大しつつあった⁽⁵⁾。しかし、この大戦間期に、カナダの外交関係の方向が模索される過程では、「大西洋国家」 (“Atlantic state”) なのか、あるいは「太平洋国家」 (“Pacific state”) なのか、などのジレンマがあったのではないだろうか。言い換えるならば、この時期は単純で合理的な過程というよりは、対立する志向のジレンマに特徴づけられるのではないだろうか。国家、政策決定者を視野に入れながら、さらに社会を視野にいれた視点から、こうしたジレンマを再考察することはできないだろうか。

本稿は、大戦間期当時、研究者であり後にカナダ外務省外交官になったエスコット・M・リード (Escott M. Reid, 1905-1999, 以下リード) に注目する。リードは、政治学者であり、外務省ではシ

ニアな政策決定者にも近いエリートであった。リードは、1905年にオンタリオ州の牧師の家に生まれ、1929年にトロント大学卒業後、オックスフォード大学に留学し、その後ハーバード大学に留学しカナダの政党制を研究していた。博士論文修了前の1932年にカナダ国際関係研究所(Canadian Institute of International Affairs, CIIA)の事務局長となり、1938年に外務省に入省した。第二次世界大戦終了前に、国際連合(United Nations)設立への会議にも出席し、第二次世界大戦後の国際民間航空機関(International Civil Aviation Organization, 1947-)、北大西洋条約機構(North Atlantic Treaty Organization, NATO, 1949-)の設立過程に参加し、世界銀行でも要職を歴任した⁽⁶⁾。

研究者としてのリードは、政策と社会との関係に強い関心を持っていた。このリードを通して、分析的に分断されがちな政策と社会との間の関係を見直してはどうだろうか。この視角は、政策決定者との距離はあるが、他方、社会の複数の価値観との軋轢をも視野に入れることができる。世論と対外関係においては、その間の具体的な媒体、あるいは世論の担い手が曖昧になりがちなので、世論にもある程度敏感な研究者やNGOとの交流がある立場の人に注目する。つまり、トップのエリートと社会の世論との中間で、両方を視野に入れた立場のリードに焦点を置くことで、大戦間期のカナダの対外関係を再検討する。この分析作業は、リード自身の留学生、研究者や外交官として、カナダ、英国、アメリカと国境を越えた活動、そして知的空間の広がりにも分析を拡張する試みともなる。本稿は、大戦間期、特に1938年外務省入省前までの期間の矛盾と、その期間を第二次世界大戦後のカナダの対外関係の基礎作りの過程としての再検討である。

2. カナダの対外関係を見る視角と大戦間期

カナダの国際関係について、これまで特徴的な三つの視角があった。

まず伝統的な視角では、イギリスとアメリカと

カナダの関係を「北大西洋の三角形」(“North Atlantic Triangle⁽⁷⁾”)として、カナダを歴史的な文脈で「大西洋国家」と位置付けた。次に、二つ目の視角では、1950年代の英連邦を基盤とした経済援助や、国際連合での中東和平外交などを中心に、カナダを「ミドル・パワー」として国際的役割を追求すると見る⁽⁸⁾。そして、三つ目のタイプでは、「ミドル・パワー」としての対外関係の「黄金期」と比較しての停滞感、あるいは対米関係の偏重を危惧する⁽⁹⁾。これら三つのアプローチに共通していたのは、大国ではないにしても、カナダを大国との関係を含めて積極的な行為体として捉えたことである。その場合、カナダが対英関係や対米関係を重要視しながらも、国際環境での自主性を模索することが強調されてきた。したがって、社会との関係は周辺化されてきている。本稿で扱う大戦間期は、時期的にはちょうど「北大西洋の三角形」の時代と第二次世界大戦後の「ミドル・パワー」の準備期間に相当するといえよう。

大戦間期のカナダの対外関係を考察する場合、伝統的な外交分析方法は、政策決定者や外務省高官に注目してきた。カナダの国際関係における活動を称賛する文脈は、政策決定者、専門家としての外交官の能力に対する高い評価と信頼感が特徴である。大国ではないが、有能なエリートが牽引して、国際関係において国力以上の役割を果たしたとみなす。大国関係とその支配性を認めながら、冷戦下での大国関係の手詰まりなど、順境とはいえない状況でさえも、カナダは対外関係を遂行してきたとする。大国支配の状況を認識し、カナダと大国との国力を指標とした関係が根底にある。社会に対する国家の自律性は高いとみなされた。注目が集まりがちなレスター・ピアソン(Lester B. Pearson)などの外務次官、外務大臣経験者たちと比較して、リードはそれほど注目されてこなかったとの評価もある⁽¹⁰⁾。

政策決定者を中核に据える研究に対し、複数の行為体を政策過程に取り入れた研究も登場しつつある。対外関係の多様化に伴い、対外関係の唯一代表的な組織的担い手としての外務省の相対化も行われ、非国家的行為体(non-state actor)として

の州政府、NGOが研究に組み込まれつつある⁽¹¹⁾。NGOは必ずしも国内にとどまることなく、その設立の過程、活動の過程で国境を越えた存在となってきた⁽¹²⁾。このように、国境を越えた非国家、非政府の行為体の関係と国家の対外関係を織り込むことになってきた。カナダの対外関係は広義に再定義せざるを得ず、複数の行為体、国内外の境界の曖昧化の状況で、民間組織のNGO、研究機関、国際組織を視野に含める必要性が出てくる。国家を重要な行為体としながらも、複数の行為体に目配りをし、国境が曖昧化した状況を前提に、国際関係を検証していく必要があるだろう。

本稿では、研究者であり、外交官でもあったエスコット・M・リードを通して、大戦間期の国際関係の中でカナダを見る。リードに焦点を絞る視点は、外交官へ向けられているので伝統的な外交分析法の延長線上にある。リードと政策決定の中核との距離は決して遠くなく、外務省高官、そして外務大臣、首相となったピアソンの側近として外務省で働いた。さらに、リードは、NGOとの関係を入れるならば多様な行為体を前提に国際関係をながめていた。外務省入省前に、カナダ国際連盟協会 (League of Nations Society in Canada, LNSC, 1921-)、カナダ国際関係研究所 (Canadian Institute of International Affairs, CIA, 1928-)、カナダ政治経済学会 (Canadian Association of Political Science and Economics, 1912-)、前進的な知識人の社会再建連盟 (League for Social Reconstruction, LSR, 1931-) ⁽¹³⁾、太平洋問題調査会 (Institute of Pacific Relations, IPR, 1925-1961) ⁽¹⁴⁾ などの研究を含む民間組織、それも国際的な広がりをもつ組織に参加していた。したがって、大戦間期の国際関係研究が組織化される時期を、社会への視線を取り込み、様々な矛盾を内包する文脈で分析を試みる。

3. 大戦間期の矛盾

第一次世界大戦と第二次世界大戦の間の大戦間期は、国際関係研究でも多くの研究者の関心を集めてきた。ところが、この大戦間期をどのように捉えるかには、複数のアプローチがある。

まず一つ目のアプローチは、この大戦間期を第一次世界大戦「後」の期間であるとみなし、第一次世界大戦の結果に注目する。ところが、大戦が終結しても、開戦前の問題を解決したとはいえないという議論である。この文脈で第一次世界大戦を危機の不完全解決としてみるならば、不安定がさらに継続して、戦後の和平の脆弱さが特徴であったといえよう⁽¹⁵⁾。つまり、大戦が解決をもたらさず、かえってさらに不安定な状況を導きかねなかったと見る。

たとえば、第一次世界大戦後をW・ウィルソン (W. Wilson) 米大統領の理想主義との関係で検討する。一方で、第一次世界大戦が終了したあとの理想に満ちた時期としての位置づけでは、理想主義の開花期として、ウィルソンの国際協調主義、国際連盟の設立が象徴となろう。あるべき国際関係が、理想主義の志向である。他方、アメリカが不参加となり、理想主義の具体化の困難を顧みるならば、理想と現実の乖離をも視野にいった捉え方となろう⁽¹⁶⁾。つまり、掲げた理想の実現が、いかに容易ではなかったかという文脈となり、大戦間期を国際組織の完成期ではなく、苦悩の源泉ともみなすのである。

次に二つ目のアプローチは、「大戦間期」は第二次世界大戦「前」の期間と見る場合で、第二次世界大戦へ至る新たな危機へエスカレートする過程を強調する。和平の実現への一方向の変化とは反対に、不透明で迫りくる危機の予感が暗示される大戦間期が見えてくるのではないだろうか。やはり「大戦間期」は安定した期間ではなく、さらに複雑化して混迷が深まっていったといえよう⁽¹⁷⁾。ここから導かれるのは、理想と現実の間の埋め難いギャップであり、第一次世界大戦の終結後、その後の困難と落胆までもが垣間見えたということである。

たとえば、国際関係史の視角から歴史学者のE・H・カー (E. H. Carr) は、この大戦間期を分析して『危機の二十年』⁽¹⁸⁾ や『両大戦間における国際関係史』⁽¹⁹⁾ など多くの業績を残している⁽²⁰⁾。第一次世界大戦後、どうして第二次世界大戦に至ってしまったのか。なぜ国際関係が好転し安定

化せずに、紛争の原因が増大しつつあったのか。このように見ると、大戦間期は平和への単純な一方向の変化とみなすには困難な構造で、解消できない不満と憎悪による不安定化として捉えてきていた。したがって、理想と現実の二者択一の議論ではなく、両者間の葛藤と苦悩も見出せる。

そして三つ目のアプローチは、この大戦間期を、外交と社会の関係における転換期と捉える。長らく、外交には政策決定者たちなどの一部のエリートのみが関わり、社会から遮断された閉鎖性と社会に対する自律性が当然視されていた。宮廷外交から職業的に育成された専門職外交官の時代となっても、外交官に求められていた資質、能力、教育などの条件をみても、選ばれたエリートが専門に遂行する仕事であるとの特徴があった。ところが、一部のエリートに限定されて、閉鎖的で社会から隔離された外交という見方には疑問が提示されてきていた。外交が、社会への影響も含め、閉鎖から世論への公開へと方向転換しつつあるとする。これは、一部のエリートのみが占有する外交がいかにか社会の世論との関係を見出していくべきかとの議論であった⁽²¹⁾。

最近の国際組織についての研究でも、多くの国々が参加する、有能な人材を集めた希望に満ちた組織の一面がありながら、理想と現実の乖離、矛盾、両者のせめぎあいという文脈が議論されつつある。つまり、一方で国際組織設立はさまざまな国々からの、さまざまな期待を背景とするが、実際に設立の過程、あるいは設立後には、本来期待されていた組織や運営とはやや異なる可能性もある。大戦間期の国際連盟も、その事例として見られるし、手放しに賞賛のみともいえない⁽²²⁾。現代の問題の出発点をどこに求めるのか。多くの場合、国際組織の創設が第二次世界大戦後といいながらも、その時間の区切りの限界が指摘されてきている。つまり、大戦間期の国際組織の経験が見え隠れし、より長期的な視角が必要となり、大戦間期に注目せざるを得ないのである。

4. 大戦間期のカナダ

矛盾と苦悩に満ちた大戦間期に、カナダの国際関係には、どのような特徴があったのだろうか。カナダは英連邦内では英国に準ずる構成国であり、設立された国際連盟 (League of Nations) でも地位を確立し、国際関係においてより積極的に活動する立場に到達しつつあった。英連邦との関係を土台にしながらも、大西洋を挟んだヨーロッパとの関係が、歴史的に中心とみなされ、さらにはアメリカとの経済関係がより重要になり、太平洋関係が周辺的のみなされがちであった。「北大西洋の三角形」と特徴づけられる場合、対英、対米関係を基軸と位置付けることができる。これは、カナダを「大西洋国家」とする位置づけも同様な文脈である。

他方、すでに日英関係や移民を通してカナダが「太平洋国家」の一つであるとの模索も始まっていた。カナダの国際関係の中で、極東の安全保障、特に日中関係の展開は危惧を含め高い関心を集めつつあった。太平洋問題調査会に研究者、外交官が参加し、カナダ国内でも地理的に近い太平洋側の地域だけではなく、東部においても政治的な関心が存在した⁽²³⁾。同時代の日本との対比で見ると、カナダは日英同盟内での微妙な位置から、日英間の対立、第二次世界大戦での敵対関係、戦後の占領へと移行していった。大国列強と肩を並べるような日本の拡張主義に対し、対英関係や対米関係を基軸としたカナダの対外関係は、戦後システムの構築国となる対比が見られた。

大戦間期は、カナダにおける国際関係研究が組織化された時期でもあった⁽²⁴⁾。カナダにおける国際関係研究は、歴史学、国際法、外交論を中心に、この時期に形成されてきた。英連邦に加え、カナダ国際連盟協会、太平洋問題調査会、そしてカナダ国際関係研究所と、構構的にも研究基盤が充実してきた。英国の王立国際問題研究所 (Royal Institute of International Affairs, RIIA) やアメリカの外交問題評議会 (Council on Foreign Relations, CFR) との連携も構築された。教育面では、大学教育において、歴史学、政治学の分野で国際関係

関連の授業が登場した。その後、専門的な実務家としての外交官が担当する時代から、より開かれて、関心を持つ人たちへと広がり始めてきていた。つまり、対外関係は、エリートの閉鎖された空間内という特徴も継続しながらも、より多くの人々が関心を持てるものとなりつつあった。

大戦間期は、カナダの位置が変化しながらも、続く時代の対外関係の基礎が作られた時期といえよう。カナダの場合には、大戦間期の国際連盟から第二次世界大戦後の国際連合には継続性が見られた。大戦間期に続く時代では、国際組織形成とそこでの活動においても存在は大きかった。これに対し、日本の場合は大戦間期とその後では、列強と並ぶ大国化志向から被占領国という立場となり、国際組織への復帰にもかなり時間がかかったので、国際関係には非連続の側面があったといえるべきであろう。つまり、大戦間期に起こったこと、そしてその後の時期にもたらされた短期的な結果においては、カナダと日本は対照的であったといえよう。

しかし、大戦間期には、カナダの対外関係にもいくつかの転換が見られる。一つ目の転換は、「北大西洋の三角形」の延長上で、カナダは「大西洋国家」と「太平洋国家」との二枚看板に移行しつつあったといえよう。もう一つの転換は、大戦間期にすでに第二次大戦後のカナダの対外関係の基礎が構築されていたとも見える。すでに見てきたように人材、教育、研究、そしてNGOの活動が、大戦間期からすでに開始されていて、さらなる展開が大戦後に見られたのである。

5. エスコット・リードからの視角

本稿は、大戦間期のカナダの対外関係を、エスコット・リードの研究者として、また外交官としての経験と人的広がりにも配慮して検証していく。だが、リードの伝記⁽²⁵⁾を目的としないので、国際関係の変化との関係で彼の立場などに言及することとなる。一人の外交官に焦点をあてる検証は、伝統的な外交政策研究のようにもみなされる可能性がある。しかし、本稿は伝統的な外交政策

研究にありがちな合理性の前提を所与の条件とせず、他の行為体との関係や活動の重層性を考慮し、政策、社会環境の変化とそれらの軋轢にも目を背けない検討を試みる。研究者であり外交官であったリードをレンズとして、カナダの変化を視野に入れながら、大戦間期のカナダの対外関係を再検討する。

リードの分析では、彼個人の民間人としての活動や思想的な側面を注視する。リードの留学経験、研究生活や外交官としての職務は、当時の国際関係を眺めるには、国境を越えた視点をもっていたといえよう。本稿では、リードと研究者たちとの交流も含め、外交の文脈のみでは把握できない部分にも注目する。たとえば、国家間関係を越えた、太平洋問題調査会のようなトランスナショナル・リレーションズの行為体も含めて多様化することとなる。そして、本稿では国際関係、カナダの政策についてのリードの苦悩についても言及する。

リードを通して、大戦間期をどのように見直すのか。一つは、国際環境をはじめカナダの政治がどのようにリードに影響を与えたか。これは、リードが受身であり、従属変数となる。もう一つは、リードがどのように環境に対して発信したかである。これは、リードが能動的であり、独立変数となる。この二つの見方は、対極と捉えられがちかもしれないが、実は表裏一体となり、リードがどのように国際関係の変化を捉え、当時のナショナリズム、社会主義、国際主義、理想と現実の厳しさを体現した国際連盟の行方をどのように捉え、思想的に苦悩したかが重要となる。

6. 英国留学とアメリカ留学

リードは、1905年にカナダのオンタリオ州の英語系の環境で、アングリカン（英国国教会）牧師を父に持つ家庭に生まれた。両親ともに、英国からの移民であり、英語を主言語とする家庭環境で育った。第一次世界大戦開戦時には、リードは小学校に相当するグレード・スクールに通っていた。1917年からは高等学校に、第一次世界大戦後にト

ロント大学トリニティ・カレッジに進学し、卒業後 1927 年にロード奨学金を受けてオックスフォード大学に留学して、大戦間期の英国とヨーロッパを経験する。その期間、当時の多様な思想との出会いがあった。その後も、1930 年にロックフェラー財団の奨学金を受けてハーバード大学大学院に進学するなど、大戦間期に、英国とアメリカと多様な思想的環境に遭遇する機会があったといえよう。研究者として、リードは、ハーバード大学でカナダの政党制について研究していたが、その研究者としての資質を見込まれ、1932 年にはカナダの国際関係研究所の事務局長に就任した。リード自身の国際連盟についての関心と支持のため、またカナダ国際連盟協会、太平洋問題調査会などに関係していた研究者、知識人やプロフェッショナルとの交流関係の中に位置したので、この国際関係研究基盤の広がりには、大西洋、太平洋、対米関係に立脚していた⁽²⁶⁾。カナダの大戦間期の国際関係研究には、NGO の活動は看過できない。1938 年、リードはカナダ外務省に入省し、大戦終盤には戦後に設立される国際連合などの国際機関設立準備にもプロフェッショナルとして関係していった⁽²⁷⁾。

経歴だけを見ると、リードは大学、留学、カナダ国際関係研究所、外務省と、華やかな順境に育まれたエリートに見えるが、実際はもう少し複雑であった。牧師であった父親の教区も、富裕層の住宅街ではなく、労働者の日々の生活を知る環境であった⁽²⁸⁾。リード自身も、高等学校を卒業する前に経済的理由で夜学に転校し、オンタリオ州政府の経理部門で働いた経験があった。トロント大学在学中の夏休みには、カナダ国有鉄道の現場労働者に読み書きを指導する仕事をし、それは労働者の目線に触れる以上の経験となっていた⁽²⁹⁾。このような経験は、将来を期待される人材であったリードの社会観にも影響がなかったとはいいがたい。その上、二十代で 1929 年の世界大恐慌とその後の経済的困窮状態に直面することとなり、大恐慌の窮状からの出口の模索としてカナダ西部から始まった CCF や LSR の社会民主主義的な思想の人々との交流もあった⁽³⁰⁾。経済や社会の問題につ

いて、労働者の生活を視野に入れたリードなりの思想的模索があったといえよう。

リードの説明では、渡英前にすでに、思想的に複数の特徴を見せていた。ナショナリストであり、国際連盟を信奉し、フェビアン・ソサエティのアメリカ版とみなされた組織⁽³¹⁾ や社会主義にも興味を示していた。しかし、リードはトロント大学在学中から国際連盟を強く支持しながらも、その困難さに苦悩する時代を過ごしていた⁽³²⁾。つまり、カナダの対外関係に興味を持ち、国家としてのナショナリズムと国際主義との矛盾に直面していたといえよう。この時期に、ナショナリズムと国際協調主義の対立とさらには社会主義の影響にも触れていた⁽³³⁾。当時カナダが階級社会であったかどうかは別として、社会にある経済力の格差を認知し、そして大学での思想的な広がりにもふれて、リードは異なる思想に知的興味を持ち、寛容であったといえよう。この思想の受容における寛容な姿勢は、カナダでの生活経験、様々な思想が展開する大学での体験とともに、リードの特徴でもあった。

留学して体験した大戦間期のイギリスは、自由主義の伝統に加えて社会主義をも含めた思想的な広がりにも触れることができる知的環境であり、ナショナリズム、そして国際連盟に象徴される国際協調主義も台頭しつつあった状況であった。リードはカナダと英国の関係を相対化する位置にも自己を見出していた。国際連盟に対する期待は大きかったが、支持者として国家間関係の在り方を模索していた⁽³⁴⁾。ここで重要なのは、彼が国家間の関係として国際関係を捉え、国際連盟の成否も国家間の関係にかかっているとみなしていたことである。オックスフォード大学には、その後カナダ外交官や大学教員になる人材も多く留学してきていた。様々な人達との出会いと思想的な広がりの中で、カナダの位置、国家と国際関係の安定についての思考が展開していたとも見ることができよう。

オックスフォード大学で、リードは英国外交官から後に外交研究者となったハロルド・ニコルソン (Harold Nicholson) とも出会っている⁽³⁵⁾。ニコルソンとは反対に、リードは研究者から外交官に

なっている。当時、リードがどれくらい外交官の仕事を意識していたかはやや曖昧であるが、研究者志向の青年が外交官や外交官志望の人たちに出会っていたことが確認できる。外交の実務と研究の関係は、国際関係論の中では、いろいろと議論される点である。待遇、仕事内容の点から、非連続性が強調される場合も少なくない。つまり、実務と研究の差が、シフトとして考えられがちということである。ある意味では、非連続の不可逆な転換とのトーンをもにじませるが、他方、所属の変更を超えて、個人としての仕事の中での継続を見出すことも可能だったのではないだろうか⁽³⁶⁾。

しかし、リードをとらえるには、彼の英国留学に加え、NGOでの活動を見過ごすべきではないだろう。一つは、国際連盟への支持についての継続性である。すでに、トロント大学入学前後から、リードは国際連盟支持を公に表明していた⁽³⁷⁾。けれども、国際連盟の提唱者が米大統領 W.ウィルソンであったにもかかわらず、アメリカは不参加となった。オックスフォード大学に進学後も、国際連盟支持は変わらず、大学内の国際連盟支持の組織でも、その文脈のスピーチをしている⁽³⁸⁾。ところが、この場合も、単純な継続ではなかった。国際連盟が持つ障害は、渡英以前からリードも気付いていて、渡英後の国際連盟支持も、手放しの支持というよりは、連盟自体が持つ困難を認知してのことであった。したがって、連盟支持は、理想と現実のはざまの苦悩の選択ということであったといえよう。

もう一つのリードの特徴は、トロント大学在学中から思想的な広がりに触れてきたことである。リードは、オックスフォード留学後はさらに寛容となり、ヨーロッパの社会民主主義との遭遇は見逃すことはできない。大戦間期のヨーロッパで、それもロシア革命後という時期でもあり、またオックスフォードの知的環境では、社会民主主義や社会主義の存在をリードは無視してはいなかった⁽³⁹⁾。

カナダ帰国後、CCF と LSR という進歩的な思想家たちの集団との交流もあった。その背景には、オックスフォードに留学していたカナダ人研究者との交流、オックスフォードの環境、さらには大

戦間期からその後の時代へと続く思想体系の中で、ヨーロッパでの社会思想の広がり、またカナダでの大不況の影響に際して、知識人がとった行動と組織化があったといえよう。法学者の S・リーコック (S. Leacock) など研究者が多く含まれていたのも注目に値する特徴である。LSR への参加の理由の一つは、国際連盟の停滞、社会改革への思想的な追求があったとみなされていた⁽⁴⁰⁾。当時の思想的な模索ともいえるであろうし、英国から帰国した研究者たちとの交流でもあった。この展開に見られるのは、現状維持に対する不満、特にヨーロッパで台頭しかけていたファシズムや独裁主義に対抗すべき思想的な選択、そして革新的な思想とののはざまでの模索だったとみなすこともできよう。

ここで注意しなければならないのは、革新的な思想を持つ人たちとの交流を、即思想的共有と置き換えるべきではないということである。リードがオンタリオ州の英語圏の町から、当時の大都市であるトロントで大学教育を受け、さらに留学を続ける中で探求したのは、新しい考え方、思想的な寛容性と社会的改革の可能性である。換言すれば、主義主張を信じるというよりは、新しい、あるいは当時の社会状況を改善する可能性がある思想を求めていたとも言えよう。そして、大戦間期の英国、それもオックスフォードの知的環境を考慮するならば、リードの知的的好奇心と寛容性を鑑みれば、イデオロギー的な傾倒というよりは、思想的な出会いとして見るべきであろう。

その一例として、大恐慌の中から出発した社会主義的な政党としての CCF があるが、リードはその組織内の思想的に極端なメンバーとは明確に距離をとる傾向があった⁽⁴¹⁾。したがって、実践的な改革活動というよりは、多様な思想への知的な関わりであったともいえよう。このあたりをどう見るか。英語系エリートとしての保守性と見ることも可能だろうが、他方、思想的な多様性に寛容でありながらも、政治的、具体的には政党支持という実践にはやや慎重であったと見ることもできるだろう。やはり、自由主義を相対化し、しかし社会主義に傾倒することなく、社会民主主義的な思

想とその実現に関心があったのではないだろうか⁽⁴²⁾。

英国留学中と、カナダの大恐慌後の世界に直面して、連続と非連続の層的な状況がみられる。一方で、英語圏、その知的環境という視点からは、継続性が認められるのはいうまでもない。英連邦内のカナダとの位置づけを前提としながらも、英国の対外関係とカナダの関係をすべて是とはせず、カナダと英国との区別の模索もあった。しかし、1920年代のイギリスの知的環境に特徴的なことのひとつは、社会主義であり、フェビアン協会のように構造化した格差への対策の模索であった。したがって、リードにとっても、この変化は特徴として看過できないといえよう。その後、社会への関心をさらに深める端緒となっていくともいえる⁽⁴³⁾。カナダのナショナリズムと自由主義、社会民主主義の対立、そして国際連盟のジレンマと当時の思想的に錯綜した状況を少なからず反映していたといえよう。

7. カナダ国際関係研究所へ

リードの研究拠点は、1930年に英国からアメリカへと移動し、カナダの政党制度研究に没頭することとなる。当時は、外交官という職業はリードの視野にはありながらも、研究者をめざしていたといえよう。その政党制の研究では、思想、機構への配慮はもとより、社会的な構造、英語系グループとフランス語系グループの関係にも言及しながら社会の多様性も研究視野に取り込んでいた。

次に、博士論文を修了する前に、カナダでの国際関係研究の機構化といえるカナダ国際関係研究所の事務局長に1932年に就任する⁽⁴⁴⁾。その経緯には、英国の王立国際問題研究所、アメリカの外交問題評議会との連携で、カナダでの国際関係研究の機構化があった。研究者間の交流、大学組織との関連科目をカリキュラムに含むための準備、人材育成を中心とした活動があった。そこでは、研究者だけではなく、外交官、関心を持つ一般市民をも含んだ活動が展開され、研究と実務、そして情報を共有する場となっていたといえよう。さ

らに、一般の人々を対象に講演会を開催し、また専門家の書いた論文を定期刊物とする学術出版を行うなど、社会への情報公開、世論喚起の役割も少なからずあった。

そして、NGOとの関係もリードの国際関係観には重要であった。国際連盟支持のことから、カナダ国内の国際連盟協会に参加し、支持の活動をしていた。すでに述べたように、彼はLSRという知識人の活動にも参加していた。また、アジアの国際関係を焦点とした太平洋問題調査会に集まる太平洋を囲む国々の研究者との交流もあった。その背景には、カナダのYMCAの代表との交流もあり、さまざまな人々、研究者、NGO活動家との関係が存在した。そのような交流を促進したのは、これらのNGOのメンバーが重複し、相互に情報交換をし、組織の活動を支える協力であった。

1933年には、イタリアのエチオピア侵攻をめぐり、国際連盟が制裁措置をとった。この制裁をめぐり、カナダ政府は支持し、財界の重鎮であるカナダ国際関係研究所幹部も支持した。ところが、それまで国際連盟を支持しながらも、その役割に苦慮していたリードは、イタリア制裁に反対を表明した。その理由は、制裁が必ずしも安定化をもたらさず、かえって更なる不安定化をもたらすこと、そしてカナダ国内の平和への追求をする人々を二分する危険性があることを挙げていた⁽⁴⁵⁾。ここにも、長年の国際連盟支持者であったことと、国際連盟の措置の効果についての疑問、そして、当時の国際関係がすでに安定化というよりは、さらなる危機へとエスカレートしていく問題があり、それに対する処方箋が必ずしもないことへの苦悩があった。加えて、国際連盟の制裁に反対した立場は、リードの進歩的なグループのメンバーとの交流やカナダ国際問題研究所の組織改革や財界寄りの幹部との違和感があったともいわれている⁽⁴⁶⁾。

このように、人格形成期ともみなすことができるリードの10代後半から20代、職業的に安定化していく30代へと移行する時期が、ちょうど大戦間期と重なる。この期間に、リードは、オンタリオの英語系が支配的な町から、トロントへ大学教

育のため、その後オックスフォード、アメリカのハーバードへと研究のため移動した。カナダに帰国後も、トロントの国際関係研究所の事務局に入り、太平洋問題調査会の会議にも参加し、オタワの外務省へ入省。カナダは英連邦、国際連盟での対外関係を展開する一方で、対アジア関係も進行していた。第一次世界大戦後の不安定なアジア情勢の中、中国をめぐる大国間関係が緊張を高めていった。カナダは大国としての参加はなかったが、英国との緊密な関係、アジア情勢の検討、そしてアジアからの移民の流入と反日系の運動の高まりと、国家間と知識人、移民の関係が重層的に展開していた。

このリードを軸にして、国際関係の展開を見直すならば、どのように見えるだろうか。前にも見たように、英国の外交に追随する立場から国際連盟の加盟国となり、北大西洋重視の「大西洋国家」としての外交関係から「太平洋国家」としてのアジアへの関心を高めた。つまり、東側の大西洋関係と西側の太平洋関係の両翼の展開へと広がりを見せていた。もちろん、この両翼のような対外関係は、同等の比重とはいいがたいものでもあったが、留学期間も含めて、南の対米関係を基軸として位置づけながらの大西洋関係と太平洋関係だった。そして1920年代から1930年代に触れた社会主義の思想的側面と大恐慌後の格差を目の当たりにしている。これらの国際関係が重層的な変化を続けながら、さらに蓄積されてきた。リードは、比較的早くからカナダを「太平洋国家」と位置付けていた。オンタリオ州出身で、英語系のエリート、英国留学を経験し、ハーバード大学、と研究を続けた若き研究者ならば、「大西洋国家」のイメージが強烈になりそうであったが、リードの場合は、国際連盟への期待ともどかしさ、アジアの特に日本の中国侵略による不安定化を危惧していた。その中で、支持をしながらも、国際連盟の役割を相対化し、新たな紛争解決のシステム構築の必要性を認知していた。

この経緯で、二つ重要なことがある。

一つは、移行期において、大国が先導して国際関係を変化させることには賛同しかねる姿勢が見

られたことである。特に、大戦間期においては、英国との関係、そしてアメリカとの関係を相対化し、そこにどのようなカナダの役割があるかを模索している。ある意味では、1950年代のカナダの「ミドル・パワー」の原型ともいえる考え方もみられる。

もう一つは、既に国際連盟の可能性を見出しながらも、その限界を見て新たな組織の必要性に気づいていた。大戦間期に、各国が様々な模索をする中で、戦中と戦後をつなぐ諸国の模索にカナダの代表として、大国との関係も重要視していた。国際民間航空機関、国際連合、北大西洋条約機構、と次々に国際組織を立ち上げ、大国間の関係が支配する過程にも参加していた。1950年代の国際連合などの国際組織での活動の足場固めになっていた。

8. 結

本稿では、研究者でもあり、外交官でもあり、国際連盟支援のNGOでも活動経験を有するエスコット・M・リードを通して大戦間期カナダの対外関係を見直す作業を行った。この作業では、国家間関係、カナダの政策、そしてカナダの知識人として研究者、NGO、そして外務省にわたる広がりの中で、リードを通してカナダの対外関係を検討し直した。一方で、エリートといいながらも政策決定者とはいいがたい立場の人物から再検討し、他方、社会との関係において、政府と社会との間での微妙な立場から、カナダの位置を多角的に再検討するという複雑な設定を試みた。

大戦間期には、国際関係において、カナダは多くの矛盾を抱えていた。第一次世界大戦後の国際連盟は、その当初の理想を実現できなかった。リードは、国際連盟の制裁の効果は、安定化をもたらすよりも新たな緊張のエスカレートをもたらすと考えた。リードの立場は研究者でもあり、彼は国際関係研究の組織化にも携わり、その後外交実務に入った。当時のカナダの対外関係を見直すには、とても貴重で有意義な立場にあったといえよう。具体的な行動という対象に加えて、国際関係を見

つめるビジョンの性格が重要であった。リードの生活変遷という個人史的な視角からの検討も可能である。さらには、リードが関係した社会的な組織、知識環境との関係で見ていくことも可能であろう。その場合、カナダ国内の英語系とフランス語系、カナダと英国、自由主義と社会民主主義、ナショナリズムと国際主義の関係など、それも、国境を超えた地理的な広がりを持つ環境でのビジョンの形成を看過すべきではない。時の流れに加えて、空間の広がりの中で、個人が社会との関係で形成する国際関係観を国際関係の変化の中で見直すことの意味もあろう。

そこで見出されたのは、個人の成長、移動、研究や仕事の広がりであった。たとえ個人を軸にしても、やはり複数の層の関係が、複数の組織や思想の層と絡み合いながら、国際関係を支えていることであり、また複数の視点からの整合性でありかつ不整合な関係でもあった。ある意味で、リードは特異なケースとも言えなくもないが、様々な交流の中での経験と選択の繰り返しの過程でもあった。単純化するには困難な過程であるが、その広さと多層性、そして対立と矛盾からの選択と展開を注視することで、国家間関係を基盤としたカナダの対外関係とはやや異なる視点から分析を試みるのができたともいえよう。

カナダ外交におけるジレンマが、リードの思想的な矛盾と葛藤の中に、より鮮明に見えた部分がある。それは、当時のカナダの知識層の国際関係を見る方法ともとれるし、大西洋と太平洋の関係に目配りしつつあった国際関係観とも無関係ではあるまい。さらに、カナダと社会の关系到配慮があった研究者であり、外交官の私的な見解とも言えるだろう。しかし、カナダの対外関係を確立する過程で、未熟という文脈ではなく、やはり選択としての幅があり、また矛盾を矛盾として認識するがゆえの模索でもあったとはいえないだろうか。大戦間期のカナダ、およびリードの模索は、カナダの役割に関連する議論にも繋がる部分もある。それは、国際関係の歴史の中で、社会についての疑問と思想的寛容性にも依拠していたといえよう。

注

- (1) 第一次世界大戦と第二次世界大戦の間の期間は、「大戦間期」とも「两大戦間期」とも呼ばれる。本論文では、「大戦間期」を使う。
- (2) J. David Singer, “The Level-of-Analysis Problem in International Relations,” in James N. Rosenau, ed., *International Politics and Foreign Policy*, New York: Free Press, 1969. Kenneth N. Waltz, *Man, the State, and War: A Theoretical Analysis*, New York: Columbia University Press, 1959.
- (3) ハロルド・ニコルソンは、外交の公開の必要性和世論の影響を配慮するべきであると議論した。H・ニコルソン著、斎藤眞・深谷満雄訳『外交』東京大学出版会、1968年、74-97ページ、244-245ページ。
- (4) 末内啓子「NGO（非政府組織）と社会の関係についての一考察——カナダ海外援助大学機構（CUSO）の設立と初期の活動（1961-1975）」『国際学研究』28/29号、2006年。
- (5) 東京へのカナダ大使館設置は、この大戦間期の1929年であった。
- (6) 詳しくは、以下を参照。Escott Reid, *On Duty: A Canadian at the Making of the United Nations, 1945-1946*, Toronto: McClelland and Stewart, 1983. Escott Reid, *Strengthening the World Bank*, Chicago: Stevenson Institute, 1973. Escott Reid, *Time of Fear and Hope: The Making of the North Atlantic Treaty, 1947-49*, Toronto: McClelland and Stewart, 1977.
- (7) John B. Brebner, *North Atlantic Triangle: The Interplay of Canada, the United States, and Great Britain*, Toronto: McClelland and Stewart, 1966.
- (8) たとえば、以下を参照。John W. Holmes. *Canada: a Middle Aged Power*, Toronto: McClelland and Stewart, 1976.
- (9) たとえば、以下を参照。Stephen Clarkson, *An Independent Foreign Policy for Canada?*, Toronto: McClelland and Stewart, 1968. Brian Bow, and Patrick Lennox, “Introduction: The Question of Independence, Then and Now”, *An Independent Foreign Policy for Canada?: Challenges and Choices for the Future*, Toronto: University of Toronto Press, 2008. Steven Kendall Holloway, *Canadian Foreign Policy: Defining the National Interests*, Peterborough: Broadview, 2006.
- (10) Greg Donaghy and Stéphane Roussel, “Escott Reid: A Liberal Idealist in a Hard-Power World”, Greg Donaghy, and Stéphane Roussel, eds., *Escott Reid: Diplomat and Scholar*, Montreal: McGill-Queen’s University Press, 2004, p.3. しかし、外交官経験者のあいだでは、カナダ外交の「黄金期」を象徴するとみなされていた。カナダ国際連合協会（United Nations Association in Canada）のピアソン平和メダル（Pearson Peace Medal）への Peyton V. Lyon の推薦状、NAC, CIIA, MG31E46, vol.46., 1988.

- (11) 最近のシリア難民受け入れ（2016年3月までに25,000人）際しても、州政府の役割が関心を集めた。たとえば、難民問題に関しては、それまでも州政府が経済政策や言語・文化政策の文脈で高い関心を示してきた。最近のシリア難民受け入れの場合は、ケベック州、オンタリオ州など、受け入れに積極的であった。
- (12) 末内啓子「ユニテリアン・サービス・コミッティー・オブ・カナダ (USCC) の草創期 (1945-1960) —超国境性と組織のカナダ化のはざままで」『国際学研究』22号, 2002年。
- (13) オックスフォード留学経験のある知識人を中心に、大恐慌後に設立された組織で、法学者のF・R・スコット (F.R. Scott) や歴史学者のフランク・アンダーヒル (Frank Underhill) がメンバーで、資本主義にやや批判的な立場をとっていた。
- (14) カナダからの参加者には、リードを含め、YMCA, LNSC, CIAAなどの組織の関係者が多くいた。
- (15) 大戦間期が安定というよりも不安定、さらなる危機や崩壊の要素を含んでいた。江口朴郎『帝国主義の時代』岩波全書, 1969年, 161-175ページ。斉藤孝『戦間期国際政治史』岩波全書, 1978年, 3-4ページ。
- (16) 篠原初枝『国際連盟』中公新書, 2010年。
- (17) 国際連盟から国際連合への移行は、問題をひきずったまま、新たな解決になっていないとする。たとえば、Mark Mazower, *No Enchanted Palace: The End of Empire and the Ideological Origins of the United Nations*, Princeton: Princeton University Press, 2009, pp.14-15.
- (18) E・H・カー著、原彬久訳『危機の二十年——理想と現実』岩波文庫, 2011年。オリジナルの出版は、1939年。
- (19) E・H・カー著、衛藤藩吉・斉藤孝訳『两大戦間における国際関係史』清水弘文堂, 1968年。
- (20) カーは日本の国際政治学の草創期において、大きな影響、そして基礎の一部を築いたからともいえよう。他方、E・H・カーについては、さまざまな評論がでてきている。日本に比較し、欧米ではその親ロシアのイデオロギー性、政治性が問われてもいる。
- (21) ニコルソン『外交』, 74-97ページ。
- (22) 最上敏樹『国際機構論 第2版』東京大学出版会, 2006年。
- (23) *Round Table*, June 1933, p.1.
- (24) 末内啓子「カナダ国際関係研究所 (CIAA, 1928-2007) 設立と国際関係研究——カナダの大戦間期における国際関係観形成の構造」『研究所年報』第13号, 2010年。
- (25) 自伝としては、以下を参照 Escott Reid, *Radical Mandarin: The Memoirs of Escott Reid*, Toronto: University of Toronto Press, 1989.
- (26) 前掲、「カナダ国際関係研究所 (CIAA, 1928-2007) 設立と国際関係研究」
- (27) 外務事務次官、外務大臣を経験したレスター・B・ピアソンの部下として、リードはオタワの外務省、ワシントン D.C.での大使館勤務を含め外務省の中核、そして第二次世界大戦末期には戦後の国際組織設立の会議に出席するなど、戦後国際システム構築のいわゆる華やかなカナダの対外関係の一翼を担ったといえよう。しかしカナダの対外関係の中核部分にいたようであるが、政策との関係や立場が複雑微妙であることが、彼の位置の興味深い所以である。
- (28) Reid, *On Duty*, p.1.
- (29) その夏の仕事経験がロード奨学金の応募で有利な条件となったとさえみられている。J. L. Granatstein, "Becoming Difficult: Escott Reid's Early Years," Greg Donaghy, and Stéphane Roussel, eds., *Escott Reid*, p.12.
- (30) 一部の極端な社会主義者との同一視を避けるべく距離をとるため、CCF と LSR への積極的な参加をしなくなった。Reid, *Radical Mandarin*, p.115.
- (31) League for Industrial Democracy.
- (32) Reid, *Radical Mandarin*, pp.23-24, p.27.
- (33) *Ibid.*, p.59.
- (34) *Ibid.*, p.55.
- (35) ハロルド・ニコルソン『外交』の著者。
- (36) カナダ外交政策研究者の第一世代の John W. Holmes や Peyton V. Lyon は、外交官から研究者、大学教員になっていた。
- (37) Reid, *Radical Mandarin*, p.27.
- (38) *Ibid.*, p.55.
- (39) *Ibid.*, p.59. 彼が、社会主義者かどうかの議論に注目する研究者もいる。本人が渡英前に社会主義であったとの記述もある。J.L. Granatstein, "Becoming Difficult: Escott Reid's Early Years," p.12. しかしながら、彼が社会主義者だったかどうかは、やや不毛な議論である。まず、彼は思想的な興味を重視していたし、今日の自由主義系の社会科学における社会構造への関心でも格差に関心があることを考慮すれば、その範囲でもあっただろう。より重要なのは、彼が戦後の国際組織を作る会議に出席した時の、旧ソビエトの代表に対する非難をみれば、社会主義者だったとみなすことは難しい。
- (40) Reid, *Radical Mandarin*, p.82, pp.87-88.
- (41) *Ibid.*, p.113.
- (42) 戦間期の思想的な限界として、リード自身もやはり先進国に、英語圏に集中していたと、後日後悔をしている *Ibid.*, p.60.
- (43) しかし、実際に第三世界のインドに赴任することで、実際の社会格差を認識したとものべている Reid, *Radical Mandarin*, p.60.
- (44) カナダの国際関係研究と CIAA については、以下を参照。拙稿「カナダ国際関係研究所 (CIAA, 1928-2007) 設立と国際関係研究」。
- (45) Escott Reid, "League must give justice as well as peace", *Saturday Night* 50, October, 1935. Escott Reid, "Can Canada Remain Neutral?", *The Dalhousie Review*, 15:2, 1935, p.135, p.141.

- (46) J.L. Granatstein, *The Ottawa Men: The Civil Service Mandarins, 1935-1957*, Canada: Oxford University Press, 1982, p.241.

参考図書

第一次資料

National Archives of Canada (NAC, カナダ国立公文書館) 所蔵

Escott Reid Fond MG31 E46

J.B. Inch Fond MG30 C187

第二次資料

Bow, Brian and Patrick Lennox. "Introduction: The Question of Independence, Then and Now" *An Independent Foreign Policy for Canada?: Challenges and Choices for the Future*, Toronto: University of Toronto Press, 2008.

Brebner, John B. *North Atlantic Triangle: The Interplay of Canada, the United States, and Great Britain*, Toronto: McClelland and Stewart, 1966.

Clarkson, Stephen. *An Independent Foreign Policy for Canada?*, Toronto: McClelland and Stewart, 1968.

Donaghy, Greg and Stéphane Roussel. "Escott Reid: A Liberal Idealist in a Hard-Power World", Greg Donaghy and Stéphane Roussel, eds., *Escott Reid: Diplomat and Scholar*, Montreal: McGill-Queen's University Press, 2004.

Granatstein, J.L. *The Ottawa Men: The Civil Service Mandarins, 1935-1957*, Oxford University Press, 1982.

———. "Becoming Difficult: Escott Reid's Early Years." Greg Donaghy and Stéphane Roussel, eds., *Escott Reid: Diplomat and Scholar*, Montreal: McGill-Queen's University Press, 2004.

Holloway, Kendall Steven. *Making Canadian Foreign Policy: Defining the National Interests*, Peterborough: Broadview, 2006.

Holmes, John W. *Canada: a Middle Aged Power*, Toronto: McClelland and Stewart, 1976.

Mazower, Mark. *No Enchanted Palace: The End of Empire and the Ideological Origins of the United Nations*, Princeton: Princeton University Press, 2009.

Pearson, Geoffrey. "Foreword: Canada Looks ahead: Escott Reid and Lester B. Pearson", Greg Donaghy and Stéphane Roussel, eds., *Escott Reid: Diplomat and Scholar*, Montreal: McGill-Queen's University Press, 2004.

———. "In Ottawa, 1946-1952." *Behind the Headlines*, 50:11, 1992.

———. "Remembering Escott Reid." *Behind the Headlines*, 57:1, 1999.

Reid, Escott M. *Radical Mandarin: The Memoirs of Escott Reid*, Toronto: University of Toronto Press, 1989.

———. "The Canadian Election of 1935 - And After", *American Political Science Review*, 30:1, 1936.

———. "League Must Give Justice as Well as Peace." *Saturday Night 50*, October 5, 1935.

———. *On Duty: A Canadian at the Making of the United Nations, 1945-1946*, Toronto: McClelland and Stewart, 1983.

———. "Can Canada Remain Neutral?", *The Dalhousie Review*, 15:2, 1935.

———. "Mr. Mackenzie King's Foreign Policy, 1935-36", *Canadian Journal of Economics and Political Science*, 3:1, 1937.

———. *Time of Fear and Hope: The Making of the North Atlantic Treaty, 1947-49*, Toronto: McClelland and Stewart, 1977.

Rogers, Benjamin. "The Canadian Institute of International Affairs." *Behind the Headlines*, 50:1, 1992.

Singer, J. David. "The Level-of-Analysis Problem in International Relations." in James N. Rosenau, ed. *International Politics and Foreign Policy*, New York: Free Press, 1969.

Waltz, Kenneth N. *Man, the State, and War: A Theoretical Analysis*, New York: Columbia University Press, 1959.

江口朴郎『帝国主義の時代』岩波全書, 1969年。

E・H・カー著, 原彬久訳『危機の二十年——理想と現実』岩波文庫, 2011年。(オリジナルの出版は, 1939年)

E・H・カー著, 衛藤瀧吉・斉藤孝訳『両大戦間における国際関係史』清水弘文堂, 1968年。

斉藤孝『大戦間期の国際政治史』岩波全書, 1978年。

篠原初枝『国際連盟』中公新書, 2010年。

末内啓子「ユニテリアン・サービス・コミッティー・オブ・カナダ (USCC) の草創期 (1945-1960) —超国境性と組織のカナダ化のはざままで」『国際学研究』22号, 2002年。

———. 「NGO (非政府組織) と社会の関係についての一考察——カナダ海外援助大学機構 (CUSO) の設立と初期の活動 (1961-1975)」『国際学研究』28/29号, 2006年。

———. 「カナダ国際関係研究所 (CIIA, 1928-2007) 設立と国際関係研究——カナダの大戦間期における国際関係観形成の構造」『研究所年報』第13号, 2010年。

H・ニコルソン著, 斎藤眞・深谷満雄訳『外交』東京大学出版会, 1968年。